

NIOKAWAKOMETEN

鳰川米店

鳰川　歩

リゾート関連企業に勤務後、家業である有限会社ニオカワに入社。2018年に父より事業を承継し、4代目代表に就任。
生産者とのつながりを大切にしながら、米の仕入れ・販売を中心に事業を展開している。

DANCHITABLE_HANAMIGAWA

SOTONOBA

団地テーブルHANAMIGAWA
一般社団法人ソトノバ

岩宗　勇希

東邦レオ㈱にて施工管理を７年間従事後、2024年からソトノバにてパブリックスペースをイイバショにする実践に取り組む。
同時に花見川団地で《ご近所以上、家族未満》を育む複合交流拠点『団地テーブルHANAMIGAWA』を設立・運営。



speakers



KAMATORI_MACHINAMI

Photo & Printshop まちなみ

宮原　恒輝

幼少期からカメラに親しみ、大学では地域観光・まちづくりを学ぶ。
千葉の映像制作会社勤務を経て、フリーランスのカメラマンとして結婚式や七五三、学校写真など幅広く撮影。
父が営む印刷業と合流し、2025年に「Photo &Printshop まちなみ」を緑区鎌取駅前に開業。写真や印刷を通して地域の人や出来事を記録し、まちに残す活動に取り組む。

SAKURAI_MISO

櫻井麹店

高須　舞

創業260年余り、現9代目、麹をはじめ味噌、甘酒、塩麹の製造・販売。
10月からは手造り味噌工房を開催し、美味しく楽しく日本の伝統的発酵食品の文化をお届けしている。





緑区の土気町・大椎町に2つの店舗を構える鳰川（におかわ）米店は昭和8年の創業。三姉妹の次女である鳰川 歩さんは、2016年に故郷に戻り、家業を手伝うようになりました。

学生時代はテニスに熱中し、社会人のスタートはリゾート開発会社の社員として奔走した鳰川さん。持ち前の負けず嫌いな性格が、全国で次々閉店が続いている米屋という業態で"勝負する"気持ちを掻き立てさせているのかもしれませんが、ただ待っているだけではお客さんはやってこないのだと、ここ数年で、特にネット販売の数字を伸ばしてきました。

2018年に晴れて事業を承継し代表を務めるようになりましたが、改めて家業に入って感じたのは、お米をつくる農家さんたちの存在の偉大さと、そこでつくられる千葉のお米の魅力。ご家族が農家として米を生産しているのも鳰川米店の可能性の一つで、生産現場の声は販売現場へと届き、また、販売現場の声は生産現場へと届けられて、その媒介役となれる存在を担っています。

ネットで売上を伸ばしている一方で「地元との関係性も大切にしています」と語る鳰川さん。大椎店がある商店街ではじめた、何か100円で買える商品があるという企画「100円商店街」も毎月開催を続けて、かれこれ7年目を迎えました。地域でのご縁も重なり、ここ数年で、お店に徒歩や自転車で買いに来てくれる人たちも増えはじめてきたのだと言います。

「会社員時代に比べたら、自由にやりたいことにトライできる環境です」と語る鳰川さん。ちば会議[vol.5]では、鳰川米店の鳰川歩さんに、これまでのキャリアと米屋としてのそのチャレンジの数々についてお話しいただきます。

鳰川米店

鳰川　歩



団地テーブルHANAMIGAWA
一般社団法人ソトノバ

岩宗　勇希

「関わっている人の多さが、花見川団地の可能性なんです。」そう語るのは、2024年11月に花見川団地商店街の一画にオープンした「団地テーブルHANAMIGAWA」を、3人の共同主宰の1人として立ち上げた岩宗勇希さんです。

岩宗さんが初めて花見川団地を訪れたのは、2021年10月のことです。当時勤めていた会社の仕事で、花見川団地の中央公園で開かれたイベントの企画運営に携わりました。ふだんは人の少ない商店街に、イベントの日には1,000人ほどが集まり、岩宗さんはその光景に驚いたといいます。30歳までに地域の活性化に関わりたいと考えていた岩宗さんは、この団地に大きな可能性を感じました。

そのころ岩宗さん夫婦は、第1子の誕生を控えて子育ての環境を考えていました。夫婦ともに実家は九州にあり、近くに頼れる家族はいません。のびのびと子育てができ、人とのつながりの中で孤立せずに暮らせる場所として、2人は花見川団地を選びました。2022年3月に移り住み、家族での「団地暮らし」が始まりました。いまでは商店街で子どもたちが遊ぶ姿が日常になり、花見川団地は岩宗さんにとって、地元以外で初めてたくさんの友人ができた場所になりました。

移住後、岩宗さんは団地を盛り上げる地域活動に参加し、イベントの企画や、写真・動画による商店街のPRなどに取り組んできました。一方で、イベントの企画運営だけでは、まちに深く関われていないもどかしさも感じていました。団地の課題解決に貢献できる拠点を持ちたいという岩宗さんの思いは、多世代でシェアする暮らしをつくりたい事業家（平岡雅史さん）、花見川団地に移住した建築士（浅子雄祐さん）の思いと重なり、3人の共同主宰で団地テーブルを始めることになりました。

団地テーブルは、「ご近所以上、家族未満」の関係を地域で育む複合交流拠点です。1階には日替わり食堂（シェアキッチン）とシェアリビング、シェア本棚を、2階にはシェアハウス（社宅）を構えています。団地テーブルは、オープンからまもなく2周年を迎えます。さまざまな人がそれぞれのかたちで関われるこの場所から、新たなチャレンジとストーリーが生まれ始めています。

花見川団地は、1968年に誕生した7,272戸のマンモス団地（日本第3位）です。いまここで、団地暮らしのアップデートが進んでいます。ちば会議[vol.5]では、団地テーブルHANAMIGAWA共同主宰の岩宗勇希さんをお迎えし、団地暮らしの魅力と、団地テーブルで始まったさまざまなチャレンジについてお話しいただきます。



Photo & Printshop まちなみ

宮原　恒輝

いつまでも暮らしたいまちづくり――――。

東金に本拠地を持つ街波通信社は元は不動産業を営む会社から派生して、誕生。東京方面の人たちにも物件を買ってもらうには「まちの良さを知ってもらう必要がある」と地域情報を発信するチームが動き出して、今に至ります。

そんな会社が20周年のタイミングに鎌取駅前にオープンさせたのが「Photo & Printshop まちなみ」ですが、店主を務める宮原恒輝さんは、小さい頃から社長である父が地域に溶け込んでいく姿を見続けてきました。

7歳の頃からカメラを持ち始めて地域を回り、中学2年生の頃には地元情報を発信するYoutuberになったという宮原さん。子どもながらに地域の魅力を見つけては、「どうしてみんな地域のことをあんまり知らないんだろう？」「知る人がいなくなったら、なくなっちゃうの？」ということを感じていたのだと言います。

そんな幼少期を過ごした宮原さんは、大学では観光まちづくりを専攻し、コロナ禍真っ只中の学生生活の中でさまざまな新規事業にも挑戦し、制作や印刷という家業の大変さも痛感しましたが、逆にその経験によって、あらゆるオーダーに応えられるスキルと対応力が磨かれてきました。

今では、時にカメラマンとして、時にクリエイティブディレクターとして県内外を奔走する宮原さんですが「もっと地元で仕事したい」と、ご縁があった鎌取駅に拠点を持つことになります。全国の写真館が次々閉店されつつありますが、実は、写真と印刷両方できる店は貴重な存在。まだオープン1年目ですが、まちのいろんな人たちが「こんなことを実現したい」という話を持ち込みはじめてくれてます。

実は今年8月の千葉豪雨でお店が大きな被害を受けて、9/30まではクラウドファンディンも実施。発信しないと気づかれないものがまちにはたくさんあるし、発信をずっと手伝ってきた会社としてできることがあると、宮原さんの挑戦は続きます。

ちば会議[vol.5]では、Photo & Printshop まちなみ の宮原 恒輝さんに、これまでのキャリアと、写真×印刷×地域の可能性についてお話しいただきます。



検見川にある櫻井麹店は1760年の創業。創業260年を超えるこの老舗を切り盛りするのは、東京で会社員を経験してから、8代目にあたる叔父の背中を追ってこの道に入った高須舞さんです。

会社員時代はIT業界のコンサルタントを務めて、誰かが作ってくれたものをお客さんに届けることが当たり前でしたが、麹屋となり、自分でつくったものを自分で届けるようになって、毎日まいにち、その仕事にたっぷり愛着が沸くようになりました。

作ることは"変わらない"ことを大切にして、売ることは、時代に合わせて"変化する"というのが高須さんのスタイル。今では全国に200軒ちょっとしかなくなっている麹屋が、どうしたらより多くの人に受け入れてもらえるようになるか考えて、積極的に取り組んでいるのが、お味噌作りの教室～麹を目に見て、手に取ってみる機会～で、その体験が、麹屋という存在を少しずつまちに根付かせていくきっかけとなりました。

一時は広く伝えることに力を入れていた時期もあったそうですが、自分たちの手に届かないところに届く違和感を感じ始めて、目の届く範囲を大切にする働き方に。麹を作ることも、お客さんと関係を育むことにも愛情を注ぎながら、高須さんの日々の営みは続きます。ちば会議[vol.5]では、櫻井麹店の高須舞さんに、9代目となる麹屋の日々とそのチャレンジについてお話しいただきます。

櫻井麹店

高須　舞